

Engilsh Novelists in Oblivion

—— Hubert Crackanthorpe (I)

清水 隆

筆者の研究領域である Charles Dickens (1812-1870) 以降の文字通り百花繚亂の作家達の中には、文字通り奇矯の名に價する人物が尠くないが、その中でも特に異彩を放つ作家の一人に Hubert Crackanthorpe が存在する。年少にして早くも英國の Maupassant (Guy de ~1850 -1893) と稱されたこの作家は、僅か二十六年の短かい生涯の總てを性生活の自然主義的解剖と言う一際特異な genre の追求に捧げた揚句、Paris の Seine 川に身を投じて了うのだが、遺された數尠い作品を精讀して見ると、當時の夥しい所謂 realism 小説と呼ばれる作品群の中に在って、奇妙な存在感を有することに氣付くのである。そこで realism 小説の權化として積年の研究対象である George Robert Gissing (1857-1903) の作風との比較検討をも交えつつ、Hubert Crackanthorpe の處女作である短篇集 *Wreckage* (1893 出版) について考究して見たい。

大法官廳法廷 (現在の高等法院の一部) の辨護士を務める Montague Crackanthorpe (1822-1913) と clergyman の娘で文學特に小説をこよなく愛好する Blanche Althea Holt (1846-1928) が結婚したのは、1869年4月6日で、翌1870年5月12日に誕生したのが夫妻の長子 Hubert である。Hubert の誕生と同時に、兩親は London 中央部の Hyde Park の南に位置する Rutland に居を定めた。厳格な法律家の父は、‘Womam was the appanage of Man, and her position was that of lawful wife or hidden mistress, this was the settled point of view. (Crackanthorpe: *Population and Progress*, p.113) と公言する堅物であったのに對し、母 Blanche は十九世紀末と言う時代に在っても自分の意見を堂々と口にする明朗且つ活潑な女性であり、この

兩親の特質が息子 Hubert に unbalance な形で継承されて居ると言う事實がその生き方と作風の隨處に散見されて興味深い。次弟 Dayrell が Eton から Oxford という定型の教育を修了して Madrid の英國大使館三等書記官として外交官の道へ進んだのに對し、Hubert は Eton から University of Genova へと進學し、若年にして早くも英國以外の大陸の空氣を胸一杯吸い込んで居る。このあたりに既に母譲りの ‘unconventional’ な一面が見受けられよう。世間的には若冠二十三歳にして文學誌 *Albemarle* の coeditor として佛蘭西語で文章をものして活躍する一方、私生活に於いては死ぬ迄續いた Mary Elizabeth (通称 Sissie) との密やかな關係を維持すると言う —— ‘He lived a life of uncompromising revolt which fittingly terminated in the chivalric gesture of his death.’ (William C. Frierson: *Realism in the Nineteen Nineties and the Maupassant School in England*, pp.38-39) —— 將に、Gissing に酷似する謂わば ‘realistic’ な生き方を貫いたのである。

Gissing が三番目の妻 Gabrielle Fleury の強い影響を受けて晩年に佛蘭西に傾斜して行ったのとは對稱的に、Hubert Crackanthorpe は若年より佛蘭西小説及び文化に傾倒して、*Les Fleur du mal* で名高い Baudelaire (Charles Pierre ~1821-1867) の *Les Épaves* に對應して ‘aspects of existence’ は ‘all the ugliness of life’ に存在すると確信し、更に、the Goncourts (Edmund de ~1822-1896, Jules de ~1830-1870) の謂う小説とは ‘la clinique de l’amour’ であって Flaubert (Gustave ~1821-1880) の作品には ‘in art there are neither beautiful nor ugly subjects.’ という原理が定着して居るとの見解に共鳴して、Hubert 自身も自らの小説の中で、(1) examinations of drab, poverty-stricken existences (2) of psychological peculiarities (3) cases presented at the clinic of love, raw, contagious, and generally beyond cure 等に関する實驗を試みると宣言して居る。この様な傾向は、第十九世紀後半の英國の realism 小説の多くに認められる處であるが、これ等は偏えに佛蘭西文學の強い影響に依るものであることは論を俟たない處であろう。

この論考で取扱う *Wreckage* (1891-1892 執筆 London: Heinemann, 1893

年出版)を含めて、Hubert Crackanthorpe が遺した小説は僅かに四篇のみで、その中の *Sentimental Studies & A Set of Village Tales* (London: Heinemann, 1895) 及び *Vignettes* (London: Lane, The Bodley Head, 1896) の三篇が生前に、*Last Studies* (London: Heinemann, 1897) が没後間もなく上梓された。その後約二十年の歳月を経て、*The Light Sovereign: A Farcical Comedy in Three Acts* (with Henry Hartland) が1917年に London の Lady Henry Hartland に依って出版され、更に約半世紀を閲して、William Peden 氏の序文を付けた *Collected Stories of Hubert Crackanthorpe* (1893-1897) が Florida の Gainesville に依り Scholar's Facsimilies and Reprints という形で1969年に出版されて居る。

處女小説 *Wreckage* は *Profiles* (54頁), *A Conflict of Egoism* (50頁), *When Greek meets Greek* (50頁) の三篇の中篇小説と、*Dissolving View* (12頁), *The Struggle For Life* (6頁), *A Dead Woman* (39頁), *Embers* (18頁) の四短篇で構成される全229頁の短篇小説集である。本論考では THE PROFILES を採り上げて、遂章的に plot を精査した上で、十七の短章を積み上げて一篇の中篇小説を創り上げた作家の意圖に迫って見ようとする。

Chapter I

On the bank a girl was sitting, her white cotton dress rucked about her knees, displaying a small pair of muddy boots, which dangled close to the water's surface. Her body was thrust forward in a cramped position, as with both hands she held a long, clumsy-looking fishing-rod. She was watching intently the movement of a fat, red float, which bubbled excitedly up and down.

She was bareheaded, and her crisp, auburn hair was riotously tumbling about her ears and neck.

Quite pale was her skin, but pale, transparent, soft, exquisite was the modelling of her fresh, firm lips.

There were great possibilities of beauty in the face; but now an all-

absorbing look filled it, the forehead puckered over the eyebrows, the lips set tight together.

(*Wreckage*, pp.1-2)

先ずは heroine Lilly の描寫である。短篇小説の枠を意識した簡潔な短文の連続が特徴で、取り分け ‘transparent’ ‘exquisite’ 等の形容詞と ‘riotously’ という副詞の使い方に作家の感性と技巧の冴えを感じさせる。

‘All was still; the rushes clustered immobile on the banks of the little stream; no breath of wind ruffled its surface. Alone a water-rat splashed, and gently rippling the water, swam across.’

(*Ibid.*,p.1)

一見俳句や短歌を連想させる乾いた静寂な情景描寫の中で、hero Maurice が紹介される。

A little way off, on the grass, a young man, in a grey flannel suit, was lying on his back, his face shaded by her big-brimmed straw hat, inside the ribbon of which were tucked some bunches of primroses; one hand thrust in the armhole of his waistcoat, the other thrown back over his head — the limp abandon of his pose betrayed that he was asleep.

Tall, with fine, broad shoulders, and a small, well-shaped head, evidently not a quite young man; but a trick of raising his eyebrows with an air of boyish surprise, made him appear some years younger.

(*Ibid.*,pp.2-3)

獲物が掛かったと呼んで Lilly に午睡から叩き起こされた Maurice は五時三十分に約束があるからそろそろ歸ろうと言うと、Lilly は一瞬 ‘At once her face clouded, the eyes half-closed, the mouth drooped, the chin

pouted. (*Ibid.*,p.4) と不満氣な表情を見せるものの、‘an amused twinkle in Maurice’s eyes’ を見て一先ず自分を抑えるのだが、戀人の些細な言動にこの様に激しく反應する彼女のこの性癖が次第に増幅して行き、臆て悲劇を惹き起す原因の要因となる點に十分に注目して置く必要があるう。

Chapter II

Lilly は現在 Guildford の郊外に在る亡父の實妹 Aunt Lisbet の家に身を寄せて居り、三ヶ月前に婚約した Lieutenant Maurice Radford の勤務する regiment は至近の距離に在って、若い二人には至極好都合と言える住環境である。Lilly には母親についての記憶は全くと言って良い程無く、父親に關しても少女時代に死別して了った故か金目當に手當り次第に書きまくる亂作の物書きとしての印象しか残って居なかつた。事實、生存中は ‘Big Jock’s’ と呼ばれ、‘tidy pile’ と評された James Maguire は、死後僅か百磅程の現金を遺したのみ、そしてその金も行方知れずとなる有様で、この行狀が妹を激怒させ、彼女は以後兄の名すら口にしない程に憎惡する結果を生じさせたのであつた。然し Aunt Lisbet も可成自墮落な女性で、毎日 brandy に浸りながら、死んだ兄に對する鬱憤の捌け口を娘 Lilly に打つけ續け、永年母親代りを勤めて來たのにそれに對して何の感謝の念も表わさない上に、自分に相談も無く勝手に結婚相手を決めて了った姪に對して強い蟠りを抱いて居る。決して亡父を快くは思つて居なかつたにせよ、事々に死者に對して面罵を繰り返す叔母の態度に、時として激しく反抗する Lilly は、‘instinctive, imperious loathing’ (*Ibid.*,p.7) と嫌惡して居たのであつたが、この日の午後 Maurice に送られて歸宅した直後に突如として事件が発生することになる。

この章に見られる Lilly の父と叔母に對する感情や、妹 Lisbet の亡兄に對する憎惡の念等の描寫は極めて realistic で現實味を強く感じさせるものであるが、特に、‘She was a thin, sharp-boned, little woman, with red lids to her greenish-coloured eyes, a long, aquiline nose and a pointed chin. When she spoke to Lilly of her father, there came into her voice a curious, rasping

intonation.’ (*Ibid.*,p.6) と言う Aunt Lisbet の將に一字として無駄のない締った表現に、この作家の並々ならぬ realist の正體を垣間見る想いがするるのである。

Chapter III

この章に於ける Maurice の決斷力に欽けた右顧左眄する煮え切らない對應が、後に Lilly を悲劇の淵に追い落す原因になる點に注目する必要がある。

父親が Bombay を離れる迄約二週間、更に歸英して自分達に逢いに來るのに一ヶ月は掛かるだろうと言う Maurice の悠長な態度に心中些か業を煮やした Lilly は、Maurice の父がこの結婚に決して乗り氣ではないと推察して、事後承諾も止む無しと即刻結婚しようと持ち掛けるのだが、父親も含めた親類の多くが Lilly の死んだ父の生前の行狀と叔母の自墮落な生活振りに眉を顰めて居るらしいと打ち明け、父に背けば立ち處に毎月の援助が打ち切れ兼ねないから、いずれ彼が逢いに來る迄結婚するのを待とうと消極策を譲らない Maurice に、Lilly は自分と叔母との關係が抜き差しならない状態に立ち至って居ることを告げ、一觸即發の危険が存在すると迫るが、兎角明日午後知人 Mrs. Newton 宅で逢おうと何の具體的な解決策も打ち出さぬ優柔不斷な態度の儘歸って了う Maurice なのである。Lilly の悲劇の萌芽が比處にも又存在するのである。

Chapter IV

The solitary candle flickering on the dressing-table made the shadows of the coming night creep back into the corners of the room, as Lilly, with swollen eyelids, and red patches on her cheeks, looked out through the window-pane.

All was still. The earth slept.

The moon poured her white light on the meadows opposite; a few fleecy clouds lazily chased one another across the sky. In the distance a

dog barked, then all was again still.

(*Ibid.*, p.p.9-10 Italics は筆者)

周囲は ‘*All was still. The earth slept.*’ という状況の中で、然し、Lilly の胸の内は激しく騒ぎ、それ故に何時迄も寝付かれない辛い夜が更けて行く……

曾って感じたことの無い程の Maurice への内心の不信感の増幅に追い討ちを掛ける様な叔母の不快極まる態度が加わって、遂に Lilly の感情が抑止力を失い、手にした parasol で叔母の側頭部を一撃して了う。倒れた叔母の哀れな姿に積年の憎悪の鬱積とそれを打ち晴らすかの様な攻撃の快感の絢交ぜになった奇妙な感覚の中で、立ち上がり掛けた叔母に更なる打撃を加える Lilly の耳朶に、何故か叔母の床に落ちる重苦しい音がある。その後暫くの間焼き付いて離れない結果を招くのである。

Gissing の多数の作品に見られる hero 達の直情徑行な行動に馴れた筆者にとって、hero ならぬこの heroine の激しい行爲が極めて目新らしく映るのであるが、これは一重に「女性」を描く筆力の相違に由来するものと考えられて興味深い。

Chapter V

The Charing Cross platform was alive with people, some hurrying hither and thither, others standing together in groups or sauntering up and down.

(*Ibid.*, p.12)

With a numb feeling of hopelessness she wandered out into the Strand.

It had just stopped raining. Noisily the omnibuses splashed past, while the hansoms, one after another, crawled along the edge of the pavement.

Some hungry-looking boys were yelling the contents of an evening paper, two flower-girls and an old man selling bootlaces, stood in the gutter. Along the pavement, brown and a-glimmer with the wet, poured a continual stream of men and women.

(*Ibid.*, p.15)

當時の大都市 London の中心部 Charing Cross 驛と盛り場 Strand の雑踏振りの描寫である。大英帝國の象徴としての首都の姿は、當然のこと乍ら、第十九世紀後半の作家達に依って隨處に描出されて居るのだが、中でも Gissing の諸作品には（特にその長篇小説に於いては）London の殆んどの地域が實に詳細に描寫されて居て、當時の市内の様子を知る上で貴重な文献とも言えるのだが、Hubert Crackanthorpe もこの中篇小説に於て合計五回も市中の姿を *real* に描いて居て、その殷賑の蔭で一人孤獨に苛まれる Lilly の悲惨な姿を浮び上がらせて効果を擧げて居るのである。

昨日の毆打事件の後、叔母が未だ睡って居る中に家を出た Lilly は、Maurice を訪れて再び結婚を迫ろうと考えるが、彼の ‘It’s not for so very long.’ という言葉を思い出して、無理に逢って又氣まずくなるのを怖れて、regiment に向うのを諦め、列車で London に出て、昨日の約束通り午後に落ち合う決心をする。そして市中の華やかさの中でかえって浮き彫りにされる ‘absolute loneliness’ (*Ibid.*, p.15) を實感するのである。

午後四時着の列車から何本かの列車を待ち續け、遂に九時二十分の最終到着列車から降りて来る乗客の中に Maurice の姿を見付けた Lilly ではあったが、‘Yes! Maurice! — hastening towards her, yet somehow not looking as she had expected him to look.’ (*Ibid.*, p.16) と譯もない違和感を抱いて愕然とする自分に氣付くのである。

Chapter VI

この章に於ける Maurice の Lilly に對する感情の變化に作家の realistic な筆の冴えを強く實感する。

The half-girl, half-child, simple and heedless, with occasional moods of confiding, dreamy gravity, and fits of charming prettishness, the easy dispelling of which he had enjoyed, had gone.

(*Ibid.*, p.19)

Capricious and irritable, with outbursts of nervous exasperation, followed by hot tears of remorse and a desperate sensuality that disturbed and almost frightened him.

(*Ibid.*, p.19)

落ち逢ってからの三日間、Strand の hotle の一室では幾度となく諍いの言葉が亂れ飛んで居た。Lilly の叔母に對する不満は理解出来ぬ譯では無かったが餘りに誇張された彼女の叔母への怒りが Maurice の結婚に對する優柔不斷に歸因するとの主張に氣付いて、彼は途迷うと同時に、幼く可愛かった Lilly の特性が何時の間かに醜惡な大人の女性のそれに變容して了って居るのを眼のあたりにして一層腰が退けて行くのを實感する。それでも ‘No longer could he love her lazily as before.’ (*Ibid.*, p.18) と反省した彼は、今週末に結婚しようと申し出るが、喜ぶと思いきや平然と話題を逸らす Lilly の態度に思わず啞然とするのである。

Chapter VII

二度と Guildford へは戻りたくない と頑強に主張する Lilly を説得し切れずに、明日彼地に一旦戻って住居や召使等の手配を濟ませ、金曜の夜か遅くとも土曜の朝には戻って來るとの Maurice の提案に、心中では結婚を強く望み乍らも、いざ相手が具體的な將來設計を口にすると、何故か躊躇する女心の不可思議の理解の絲口を、

Maurice, I don't know what it is. Only I feel very miserable. Everything seems in such a *tangle*. I feel as if *something strange* were going to happen to me. I want to think about lots of things. That's why I want to

be alone, quite alone.

(*Ibid.*, p.22 Italics は筆者)

と言う Lilly の言葉の中に見付け出すことが出来そうな気がする。即ち、この時点で極度に ‘*a tangle*’ の状態に在る彼女の心の中から最早 Maurice の影は消滅しかかって居て、孤獨な状態の中で ‘*something strange*’ が次第に頭を擡げ始め、臆ては孤獨な心の命ずる儘に墮落の淵へと自ら身を沈めると言う結果への引き銃を引いたと見るのが妥当であろう。眼前に在る現實に絶望した時、人は唯本能に任せて行動を起こすと言う心理の典型でもあろうか。

Chapter VIII

Lilly の degradation は、意外に速く、意外な形で進行する。‘*tangle*’ な心理状態の中に ‘*something strange*’ が確實に存在し始めた彼女を現實に墮落させたのは Adrian Sufford の出現である。

Against the pillar in the centre of the room a powerfully built, dark-faced man was leaning. His face, in contrast to the whiteness of his shirt-front, seemed copper-coloured, and there was a singular massiveness about it; bushy eyebrows, heavy, black moustache and vermilion lips.

(*Ibid.*, pp.22-23)

restaurant で偶然出逢った Sufford は、Maurice の知り合いで、Maurice は Lilly に彼を極く一般的な友人として紹介するのだが、その時点で Lilly に取っては Sufford の ‘bushy eyebrows’ ‘heavy, black moustache’ ‘vermilion lip’ ‘the prickliness of his eyebrows’ ‘the strong muscles on each side of the bull-like throat’ と言う Maurice にはない ‘stout’ な印象が強烈に實感されて、將に ‘the big man’ (*Ibid.*, p.23) として認識してろう。他方 Lilly はその繊細な感受性故に、‘she was watching his hands, as they smoothed the cloth in front of him — white and fat, tipped with pink finger-nails,

carefully trimmed to a point.’ (*Ibid.*, p.24) と言う Sufford の外見からは想像も出来ない清潔で繊細な一面をも見過さなかったのである。

Chapter IX

翌朝の驛頭での別れの scene の描寫は、簡潔で短かい文章を連らねて乾いた効果を狙うこの作家獨特の技法の冴えを實證する。

Then, of a sudden, he turned his face, contorted as in acute physical pain, and with a dryness in his voice, passionately implored her to return.

But he did not touch her. Strange that she was observing him, curiously, for the first time conscious of *distinct antipathy* towards him. He looked — yes, ridiculous, as if ashamed of having betrayed his emotion. The sight of this emotion sent a spasm of *irritation* through her. Next she felt an almost uncontrollable inclination to laugh.

(*Ibid.*, p.25 Italics は筆者)

朝から双方に兆して居た ‘the painful tension’ が、Maurice の意識的な素氣ない態度に依って一氣に頂點に達し、Lilly の中に確固とした ‘*antipathy*’ の念を生じせしめたのである。Maurice の短絡的な行動に対する Lilly の自虐的な笑いは、彼女の心の中で既に彼に對する信頼と愛情が喪失して了って居ることを如實に證明して居るのである。そして ‘*antipathy*’ は臆て必然的に ‘*irritation*’ にと變化して、愛は寧ろ憎惡へと姿を變えて行くことになる。

疲れ果てて hotel へ戻り、身體を横たえた Lilly は幻想的な夢を見る。

There passed visions of a woman with yellow hair indolently reclining against the cushions of a victoria; of the red-bearded police man who had told her the way to the hotel; of the stare of a thin man in frock coat pinched at the waist; of the gold-spotted veil, and of the brooch set in imitation pearls, which she had carried home with her.

Then the bronzed countenance of Sufford, his bright, red lips, and fat, white hands appeared as he leant against the central pillar of the restaurant.

And now Maurice was there too. Side by side they disputed for her. Maurice troubled, with tears in his eyes; Sufford still, massive as a statue.

(*Ibid.*, p.26)

‘yellow hair’ ‘a red-bearded police man’ ‘the gold-spotted veil’ ‘the bronzed countenance’ ‘bright, red lips’ ‘white hands’ という多彩な色付きの夢は、Lilly の内心の葛藤を表わすものであり、その夢が徐々に彼女の内なる願望へと姿を変えて行き、遂には彼女の意識の中で最も重要な位置を占める Maurice と Sufford との対立に及び、泣きじゃくる前者に対して泰然自若の后者に彼女の心が移って行く過程が dry な筆致で描寫され、‘Which loves her best ?’ (*Ibid.*, p.26) と問う闇の聲に向って ‘I do.’ と自身満々答えて、その ‘soft’ で ‘warm’ な大きな手で Lilly の顔を包み、‘bright, red lip’ を重ねて来る Adrian Safford の行動が、彼女の彼への屈服を暗示するのである。

Chapter X

夢から醒めた Lilly は、傍の椅子に Safford の姿を見付けて愕然とする。昨夜見た夢との見事な符合に驚くと同時に、夢の中での淫らな想像に對する羞恥心から目覺めぬ振りをする Lilly に、Maurice Radford の所在を尋ねた Sufford は、二三日後に歸京の予定と聞くと、今夜劇場へ行こうと言う Lilly の ‘loneliness’ を見越してそれに付け入る手段を弄して、彼女の心を難無く擱んで了う。

The blood rushed to her face, in hot gasps her breath came and went, everything but Safford swam in a mist and gone; impulsively she lifted her burning face to his and murmured:

“Tell me that you love me. Then I’ll come.”

(*Ibid.*, p.30)

逢って僅か一日足らずの男性に魅かれて了う Lilly の心情には当然のこと乍ら Maurice に對する ‘antipathy’ と ‘loneliness’ が内在して居たけれど、看過してならないのは Lilly に依って代表される娼婦性の問題であろう。若くして佛蘭西の文化及び文學に親しんだ Hubert Crackanthorpe は、必然的に彼國の開放的な性に對する思想を享受して居たに相違あるまい。然し乍ら嚴然たる stoicism の存在する第十九世紀後半の英國に在っては、素直な思想及びその自由な表現は將に taboo であり、當然控えなければならなかったであろう。そこでこの作品に於いて、Adrian Safford に託された ‘massive’ で ‘bold’ な強い男性を象徴する外見的印象に加えて、Lilly の關心を惹く動作として ‘he thoughtfully jingling some money in his trouser-pocket’ (*Ibid.*, p.29) と財力を誇示させて、物心両面に亘る強い男性像に對する女性の偽わりのない對應振りを描きたかったのではあるまいか。作家のこの試みは、その短かい生涯の故に充分に開花することは難しかったとは言え、來るべき新世紀に於ける自由な思想と表現の發展への些かの stepping stone としての役割は果して居るものと確信する。

Chapter XI

第十九世紀の英國小説に數多く出沒する所謂『惡漢』の存在については、Gissing の諸作品の分析的研究に於いて徹底的に検討した處であるが、その殆んどが種々の ‘plotting’ を弄して hero 及び heroine を窮地に追い込むと言う pattern であったのに比較して、‘rascal’ Adrian Safford の場合はその趣きを少々異にして居ることに氣付く。本來佛蘭西小説の一手法である『惡漢』の存在價值は、長篇小説に於いて所謂「狂言廻し」的役割を賦與されてその周到な ‘plotting’ に依って ‘plot’ を複雑化して、讀者の興味をそそるものであり、従ってその人物像の創造に當っては作家の相當の意氣込みが感じられる處だが、この Adrian Safford に關し

ては、中篇小説と言う条件はあるものの、‘rascal’として抜ん出た人物像と言える程の描き込みは見られない。この人物の存在理由は、heroineの degradation の切っ掛けを提供する爲にのみ在るに過ぎないから、勢いその思想及び行動は極めて stereotype であると断じざるを得ないのである。

Café Royal で食事をし、the Empire で観劇した後、Lilly を連れ込んだ Safford の部屋は少々異様な佇まいで、この人物の特性を暗示して居る。

Adrian Safford's chambers were somber; even on this summer morning shadows lurked in the corners of the lofty spacious room. There was no window; the light struggled in as best it could, through a ground glass skylight. On the walls, maroon-coloured hangings; from the fireplace to the ceiling reached a huge overmantel of black, carved oak. The rich scent of a burning pastille struck *a note of sensuous mystery*. It was all curiously characteristic of the man.

(*Ibid.*, p.30 Italics は筆者)

‘*sensuous mystery*’ の mood 漂う薄暗がりのこの部屋の中で、唯一明るいものは白い table-cloth の掛かった食卓のみである。(‘Amid the dark tints, a single patch of colour — the white table-cloth (*Ibid.*, p.31) 然し朝食の席に就いた Safford の顔付きは、部屋の雰囲氣と match した暗いものであった。(‘a scowl deepening the bronze of his face’ (*Ibid.*, p.31) その顰めっ面の原因は隣室に横わる女性の縮れた髪と顎の形、そして物問いた氣に涙を溜めた大きな眼等に在ったのである。唯單に Lilly の ‘*mutinous freshness*’ に興味を抱いて誘惑したに過ぎない Safford にして見れば彼女が數日中に Maurice と結婚する予定と聞かされた途端に今後厄介な事態を惹起し兼ねないと直感的に判断し、今回の行動を反省すると同時に、情を通じたが故に俄かに一人よがりな感情を無意識に押し付けて来る女性特有の習性に對して、思わず “Damn.” と嫌惡感を顕にしてうのである。“Tell me that you love me.” と囁いて Safford の意に従った Lilly の

行動は Lilly の一人よがり、所詮自己欺瞞以外の何物でもなかったことは自明の理であろう。

Chapter XII

この作品に於いて最も長い十二章は、heroine の degradation に陥る伏線として重要である。「もう十時なの？」と屈託なく起き出して来た Lilly は、Safford の不氣嫌に気付かず、朝食のパンを切って欲しいと甘え、「良い天気だから外出しましょう。昨夏 kingston の川邊に行ったけどとても楽しかったから、これから一緒に行きましょう。」と無邪気に誘い、Maurice と一緒だったのかとの Safford の問いに「妬いて居るの？だから不機嫌なのね。」と勝手に決めつけ、「Maurice とはもう一ヶ月も逢って居ない気分よ。初めての時の様に kiss して頂戴。だって貴男を愛して居るのだから。」と coquettish にせがんで見せる。Maurice が今朝歸って来るのだから直ぐに戻った方が良いと勧める言葉に、下唇を震わせて「嘘でしょう？嘘だと言って！」と反撥し、二人の結婚の約束については知らなかったのだとの Safford の辨解に、「私に手を出したのは唯のお遊びだったの？でも私は貴男を愛して了ったのよ。」とそれでも男の本心には少しも気付かず素直に應じて、黙って居れば判りはしないからと狡猾に示唆する彼に向かって、「Maurice に總てを打ち明けて、直ぐに此處に戻って来る。だって彼とはもう終ったのだから。」と斷言し、自分の責任だから勝手にすれば良い早く歸れと尚も突き放す Safford に、

“Oh! for God’s sake, don’t send me away. You will kill me if you do. Can’t you see how I love you. There seems to be nothing else in the world for me but you… But I promise you that I will do whatever you tell me; I will be no trouble; I will not speak to you if you do not want me to — I will do anything.”

(Ibid., pp.37-38)

と泣きながら哀願する Lilly の心情は、この時點に於いては將に眞摯であ

り又清純なものである。然し、Maurice を裏切り、更に Safford にも逃げられた後の鮮やかな迄の豹變振りの伏線としては、極めて realistic な効果を産み出して居ると言えよう。その萌芽は流石の playboy の Safford にも — ‘So fearful was he lest she should resent her submission, that the unnatural calm which had come over her passed unnoticed.’

(*Ibid.*, p.39)

と氣付かぬ程の些細な、然し Lilly に取っては嚴然たる形で、存在して居たのである。

Chapter XIII

對稱的な人物を配置することに依って劇的な効果を産み出すと言う realism 小説に特徴的な技法は、Gissing の小説にも多用されて居て、特に、*New Grub Street* に於ける heroes の Edwin Reardon ↔ Jasper Milvain 及び heroine の Amy Reardon ↔ Marian Yule の組み合わせは、その鮮烈な迄の對比に依って、realism 小説としての價值を高めて居るが、Hubert Crackenthorpe は *Wreckage* に於いて、稍異質の比較對稱法を驅使して効果を擧げて居ることに氣が付く。即ち、Lilly を中心にしてその對極に Maurice と Safford を据え、兩者の對稱的な言動を強調することで、heroine の心の動きを克明に描出すると言う手法である。“I will go because I can’t help doing what you tell me. But I shall come back.” という固い決意を抱いて Maurice の許へ戻った Lilly は、其處で眼にした Maurice の餘りの慘めさに強い shock を受ける。

He was so different from him whom she had just left. And, as she recalled Safford’s massive frame and bronzed countenance, she found herself looking at Maurice, *critically*, as at *some stranger*, each detail of whose person was acutely repulsive.

(*Ibid.*, p.40 Italics は筆者)

昨日迄結婚の對稱として考えて居た男性を ‘critically’ な眼で觀察した結果 ‘some stranger’ として認識せざるを得なくなった Lilly の胸中には、言う迄もなく二人の男性についての無意識な比較検討と言う働きが存在したのであった。「何處へ行って居たのか。」「Adrian の處よ。何か言うことあるの。」「何も無いのなら歸る。」「何處へ。」「Adrian の處よ。唯結果を報告に来た丈だから。」この短い會話の後で、泣き崩れる Maurice を見て、Lilly は一瞬憐れみを覺えつつも ‘Then for one short moment she pitied him. Vaguely, as one pities an animal in pain.’ (*Ibid.*, p.41) と極めて冷靜に觀察を續けた揚句、この Maurice の存在さえ無かったら、Safford は自分を離しはしなかつたろうにと單純に考えて了う。當然彼の眞意に氣付いて居ない彼女の幼稚な男性觀が顯著となる scene である。

Chapter XIV

Lilly was now alone. Maurice and she had parted — probably for ever. And Safford had disappeared. They had told her at his chambers that he was gone. At first she believed that they were lying, and obstinately waited for him during long hours. But it was in vain. Then she searched for him in the streets, wandering hither and thither in the hope of meeting him. But amid the crowd there were no signs of his massive frame.

(*Ibid.*, p.42)

眞底 Safford を愛して了った Lilly の、溺れる小動物が何かに縋ろうと必死に腕くのと同様に、唯彼との束の間の愛の思い出に獅齒みつく姿は、彼女自身の無知とそこから發生する衝動的な言動の故とは言え、何とも痛ましい限りである。街中を彷徨する内に、體型の似た他人を Safford と見間違えて、危く聲を掛けそうになったりして、慌てて我に還ると言う様な愚行を繰り返した末に、或る晩出掛ける前に化粧した顔が映る鏡を凝視した Lilly は、その糞れて艶を失った表情が、あの aunt Lisbet のそれ

に酷似して居るのに気付いて慄然とする。一瞬彼女の脳裏から少女時代の思い出も、Maurice や叔母の姿も、又戀しい Safford の ‘massive frame’ も總て過去の灯の中に消え失せて、‘With no common speed, *the end* was drawing near’ (*Ibid.*, p.44 Italics は筆者) と言う想いに陥るのである。

Chapter XV

‘*the end*’ に向って轉げ墮ちて行く Lilly の哀れな姿は讀者の想像に委せて、作家は lieutenant Maurice Radford の其の後の心境の變化を追求する。Lilly との衝撃的な別離から約三ヶ月が過ぎて、Maurice は、

For the first time the mechanism of her nature was laid bare before him. He saw many things that he had never heeded before, passing them over as of no significance, things that now, with curious intuition, he understood.

(*Ibid.*, p.46)

と悟り、悲劇は最早 Lilly とは無関係で、その原因は Adrian Safford 如き無頼漢に未來の妻たるべき Lilly を唯々諾々と渡して了った自らの不甲斐無さを只管咎めると同時に、‘And the exaltation of his love and of his pity rose.’ (*Ibid.*, p.46) と自覺して、‘Yes, he must save her. It was not too late. All the fine elements in his nature forced their way to the front in support of this resolve.’ (*Ibid.*, p.46) と決心するのである。

Chapter XVI

更に數ヶ月が経過して、Maurice が Lilly の居處を探し當てて再會を果すこの章には、前章にも増して real な描寫が汪隘して居る。二人の會話を中心に、永遠の別離の止む無きに到る realistic な狀況を追って見よう。

The first thing that struck him was its shameless disorder—on the table, in the centre, a great litter of old newspapers; some tattered, yellow-backed

novels; a half-finished cup of tea, stale and greasy; the remains of a cake, with crumbs scattered on the floor; a packet of cigarettes, two almost empty glasses. There were only three chairs, and on each some article of clothing had been thrown, a bonnet, a petticoat, or a pair of stockings. On the mantelpiece lay a bunch of withered roses, and opposite the mantelpiece stretched a curtain which evidently divided off the bedroom.

(*Ibid.*, pp.47-48)

「誰なの？」とのカーテンの向うの聲に「お客様ですよ。」と答えた maid-servant に「今直ぐに行くわ。」と鼻歌混りの返答は更に讀けて「誰かしら？ Dick なの？それとも Nell Chambers? 髪を梳く間待って居て。」と懶氣に響く。暫くして姿を現わした Lilly は、‘Lilly, and yet not Lilly, but different with a difference that chilled him’ (*Ibid.*, p.49) と、Maurice に取って將に別人の趣きで、誠に衝撃的なものであった。「こんな處から早く出なければ」と叫ぶ Maurice に、「良く探したこと。もう二度と逢うことなど無いと思って居たのに。私のことすっかり忘れて了って居たでしょう？」と外々しく答える Lilly は、「こんな環境から抜け出して、結婚して新らしくやり直そう。」と懇願する彼に、‘You’re quite serious? You want to marry me now — after all that has happened?’ (*Ibid.*, p.50) と自嘲的に言い返し、‘I could never marry a man I didn’t care for.’ (*Ibid.*, p.50) と冷然として言い捨てる。「今のこの暮らしが如何なものか判って居るのか？この儘では將來は無いのだよ。」「私がこの生活に満足して居ると思いたくないのね。未來のことなんか考えないわ。」そして遂には、‘I’m done for, and the sooner it’s over the better.’ (*Ibid.*, p.51) と言い放ち、‘Oh, don’t go on saying that over and over again. Just get the idea out of your head, once and for all. That’s my last word.’ (*Ibid.*, p.52) と、尚も必死に説得を試みようとする Maurice に止めを刺した上で、‘But how’s a girl to keep her looks in this hell of a life?’ (*Ibid.*, p.52 Italics は筆者) と吐き捨てる。當然のこと乍ら、好んで現在の境遇に落ちた譯ではない Lilly の悲痛な叫びと考えられよう。今後の生活の資にして欲しいと彼の差し出した幾許か

の金を、あっさり受け取って china box に投げ込んだ Lilly は、唯一言
‘I’ll see about it’ (*Ibid.*, p.52) と素気無く呟く。

An irresistible longing to escape from the stifling atmosphere of the
room, to be once more in the street, swept over him. And as he groped his
way down the dirty staircase he felt physically sick.

(*Ibid.*, p.53)

この Maurice Radford の心境の底に存在する人間の心理の realism を描
出することこそ、この作家の目指したものの萌芽であったと言えよう。

Chapter XVII

翌日氣を取り直して再訪した Maurice は、然し、何の手掛かりも残さ
ず Lilly が失踪したと報らされる。尚も探し求めた彼は、或る雨の夜に、
the Charing Cross Road で偶然に彼女を発見し懇願を繰り返すが、‘she
was sullenly obdurate.’ (*Ibid.*, p.53) と無視される。其の後人傳てに Regent
Street 裏の public house で時折 Lilly を見掛けたと聞かされるが、臆て
‘What had become her, no one knew and no one cared.’ (*Ibid.*, p.53) と消
息を絶つ scene でこの物語は終焉を迎える。

PROFILES 一作に限っての結論として、第十九世紀末葉の英國社會に
在って、彼の Oscar Wilde (1854-1900) が禁斷の園に踏み込んだのと同
様に、Hubert Crackanthorpe も又、性衝動に依って破滅的な人生を送るこ
とを餘儀無くされる人間の弱さを勇敢に採り上げて、その心情及び生態
を直截に描出しようとした點に、realism 作家の一人としての存在價値を
確認することが出来たと言えよう。然し、全體的な評價を下すのは、當
然乍ら残る六篇の中短篇小説を精査した上での次の仕事となる筈であ
る。

本稿は平成13年度札幌大學研究助成制度による研究成果の一部である。